おおさか KEYわーど 第25回

摂津国一宮（いちのみや）の誇りと歴史が磨いた美意識

写真 1

写真 2

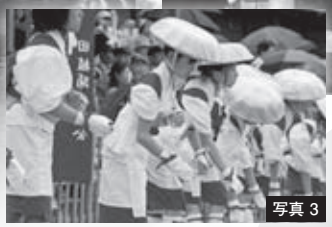
写真 3

写真 4

写真：1　反橋
2　御稔女の神田代舞
3　早乙女の田植踊
4　八乙女の田舞　　写真提供：住吉大社

大阪では十日戎の宝恵駕籠（ほえかご）や天神祭の船渡御（ふなとぎょ）など、エネルギッシュな祭礼の印象が強いが、六月十四日に住吉大社で行われる「御田植（おたうえ）神事」は、国の重要無形民俗文化財にも指定され、古雅にして優美な神事である。その成立は、神功皇后が御田（おんだ）を作らせたもうたことに由来すると伝えられ、田植えにおいて音楽を奏で歌をうたい、踊りや舞を演じることで穀物の霊力を高め、豊作を祈願するのである。

「御田植神事」は、植女（うえめ）らが神事奉仕の資格を得る「粉黛式（ふんたいしき）・戴盃式（たいはいしき）」からはじまり、本殿祭を終えてから行列を整え、境内の南にある御神田（ごしんでん）（約600坪）へと進んで「御田式（おんだしき）」が行われる。御神田の舞台では、菖蒲の花飾りを頭につけた緋袴姿の八乙女（やおとめ）による「田舞（たまい）」が奉納され、つづいて能の手振りをとり入れ、雨乞を祈願する龍神の舞とされる御稔女の「神田代舞（みとしろまい）」が舞われる。八乙女の田舞は、奈良・平安時代の古い手振りを伝える貴重な文化財で、唄われている歌詞は「枕草子」にも登場しているという。そして、花笠をかぶり早苗色の衣も鮮やかな植女より苗を渡された替植女（かえうえめ）らが、御神田に降りて田植えを進めていく。

さらに甲冑を着た武者による「風流武者行事」、童子による「棒打合戦（ぼうううち）」と神事はつづき、「田植踊」や、「エー　住吉さまのイヤホエ」の歌詞で知られる「住吉踊」が約百五十人の踊り子たちによって盛大に繰り広げられる。

由緒ある神事を維持する神社や氏子、地域の人々などのご苦労は大変だろうが、それを後世へと守り伝える関係各位の使命感とプライドも高く、眼に鮮やかにくりひろげられる典雅な時代絵巻の情景は、全国に二千を越える住吉神社の総本社である、“摂津国一宮”たる住吉さんの貫禄でもある。

住吉大社はいまも信仰の生きるお社であり、ふと散策気分で訪れたときも、清浄な神域の雰囲気に身がひきしまるとともに、日々の心の迷いや憂いが癒される気がする。“住吉造”と呼ばれ、国宝に指定された本殿は、屋根の切妻の力強い直線など美しく、文楽・歌舞伎「夏祭浪花鑑」ゆかりの鳥居前や、川端康成の小説の舞台である反橋（太鼓橋）など、美術工芸や建築、演劇や文学とも関係が深い。

この三月、住吉区役所・すみよし博覧会実行委員会が主催する「アート de すみ博 2012 ～日本画が伝える住吉の美術風土～」で、住吉大社の絵所や日本画の生田花朝（かちょう）、中村貞以（ていい）についての座談会の司会をした。2007年からはじまった「すみ博」は地域の歴史・文化と現代の街や人をむすぶユニークな企画であり、地元の関心も高く、住吉の豊かな歴史を語ることが、そのまま大阪人が醸成した美意識を語るのと同じだと痛感した。年に1度の「御田植神事」も、歴史の風雪に耐えて洗練された美意識を現代に伝える神事なのである。

筆者プロフィール
橋爪 節也（はしづめ せつや）
大阪大学総合学術博物館館長／大学院文学研究科教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室主任学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念　木村蒹葭堂―なにわ　知の巨人―」「北野恒富展」「没後80年記念　佐伯祐三展」などに携わる。編著に『大大阪イメージ―増殖するマンモス／モダン都市の幻像―』（創元社）など。